

第2回グリーンインフラ懇談会 での主なご意見

※赤字は、資料2「グリーンインフラの今後の方向性(中間整理案)」の対応箇所。

《グリーンインフラの意義について》

- 全体としてリスクに関する内容が不十分。自然現象や社会現象に伴うリスクが年々増大している中で、効果的に対応できる手段がグリーンインフラであり、その役割を議論することが重要。また、企業経営のリスクヘッジとしても有効であることを明確にするという。→ 「社会課題に応じたグリーンインフラへの期待(意義)」(P8)
- 自分の地域を自分たちで守るというコミュニティを形成していくことが重要。そのような機運を醸成することがグリーンインフラの価値であると強調したらどうか。→ 「社会課題に応じたグリーンインフラへの期待(意義)」(P8)、
「①国民的な機運・理解の醸成」(P15)
- コミュニティという用語は、伝統的な地域コミュニティだけでなく、近年ではビジネスコミュニティなど多様な形態のコミュニティが存在。用語を使う際は留意を。→ 「社会課題に応じたグリーンインフラへの期待(意義)」(P8)、「グリーンインフラの概念について(整理)②」(P10)、「①国民的な機運・理解の醸成」(P15)
- 冒頭から「ネイチャーポジティブ」やNbSという用語が示されているが、一般の人には分かりにくいのではないか。自然資本を活用してインフラ整備を行うことと、インフラ整備における自然環境への配慮の両面があると伝えればよいのではないか。→ 「グリーンインフラの今後の方向性について(中間整理案)」(P2)

※赤字は、資料2「グリーンインフラの今後の方向性(中間整理案)」の対応箇所。

《グリーンインフラの概念について》

- グリーンインフラの定義は、できるだけ広くしておくべき。省庁連携のもと、グリーンインフラの定義を矮小化せずに、今回の議論の対象を示す工夫が必要。森林、里山、農地などをどう扱っていくのか、扱いについて整理が必要。→「**グリーンインフラが存在している場・空間について**」(P11)
- 管理者・所有者に拘らず、幅広いステークホルダーが関係するという点を明記すべき。目標や指標の議論にも影響していくのではないか。→「**グリーンインフラの概念について(整理)①**」(P9**主な特徴⑤**)
- ①広域的な観点から、全体として機能を発揮させる戦略性、②官民の努力による持続性の担保、の2点を示す「戦略的計画」が重要な視点。「ネットワーク」という視点が不足しており、地域のニーズを踏まえつつ、全体のネットワークとして機能するような戦略が重要。グリーンインフラとグレーインフラを効果的に組み合わせることで、未来の社会を形成できるという視点を強調すべき。流域治水関連法の附帯決議でも、グリーンインフラのネットワーク化が位置付けられている。→「**グリーンインフラの概念について(整理)②**」(P10)
- グリーンインフラは、精神面の安定性や災害関連死の防止などの効果も期待でき、緩和策だけではなく、適応策も効果として強調して良いのではないか。→「**グリーンインフラの概念について(整理)①**」(P9)
- 概念図については、環境が基盤として位置づけられており、的確に表現しているのではないか。一般の人にも分かりやすい整理であり、図のデザインを工夫すれば更に効果的。また、国連のミレニアム生態系評価における4つの生態系サービスを重ね合わせることも可能ではないか。→「**グリーンインフラの概念について(整理)①**」(P9)

※赤字は、資料2「グリーンインフラの今後の方向性(中間整理案)」の対応箇所。

《グリーンインフラの目指す姿「導入が標準となる社会」について》

- 「グリーンインフラの導入が標準となる社会」を目指すという方向性は、規制の前提という考え方にもなり、適切ではないか。自主的な取組に頼ることが難しい中で、「標準」とすることで規制が前提にあるという捉え方ができ、今後インセンティブ設計も検討しやすくなるのではないか。
→「グリーンインフラの関係者が共通して目指す姿について」(P13)
- 行政視点の言葉となっており、一般の人にも伝わりやすい内容とする必要。例えば、今の推進戦略の4つの社会像を取り入れていくと、より多くの人々の理解を得やすい。
→「グリーンインフラの関係者が共通して目指す姿について」(P13)
- 既存の里山等環境を考えると、「導入」という用語には工夫が必要ではないか。
→「グリーンインフラの関係者が共通して目指す姿について」(P13)

※赤字は、資料2「グリーンインフラの今後の方向性(中間整理案)」の対応箇所。

《取組の方向性について》

- グリーンインフラの指標としては、人工資本、人的資本、Well-beingでいいと考える。経済学のロジックから、自然資本や新国富指標の向上が将来のWell-beingの向上に繋がると整理できる。
→「**グリーンインフラの関係者が共通して目指す姿について**」(P13)
- 国レベルでの計画に基づく取組も大切だが、自治体レベルにいかに浸透させるのかが重要。分けて議論した方がいい。知見や人材が不足する自治体への技術提供や支援の強化が必要。自治体ニーズをより把握するために、自治体が国に求める内容や課題などについてヒアリングすることも考えられる。
→「**③官民の取組を促進する環境整備**」(P17)
- 中間支援組織の役割として、実装だけでなく、グリーンインフラの機能を持続的に維持していくために必要という視点も重要。中間支援組織のイメージ図は、各省庁が全ての出発点として描かれるのは好ましくなく、工夫が必要。→「**③官民の取組を促進する環境整備**」(P17)、「**【参考】グリーンインフラに関する中間支援組織**」(P30)
- 自治体を後押しする取組として、国土地理院と連携し、全国の自然資本のマップ図のような情報を公表することができれば、自治体にとっても大きなメリットとなる。→「**⑤新技術・DXの活用**」(P19)
- 主体により、課題が異なる。中間支援組織にとってはコスト負担、企業にとってはリスクが課題であり、リスクとコストをうまく説明する必要がある。企業のリスクに関する内容が不十分であり、時間軸の考慮、不確実性があるという点も記載した方がいい。→「**③官民の取組を促進する環境整備**」(P17)
- 事業による影響に対する代替措置としての、アウトサイドミティゲーションの考え方も入れておいた方がいい。
→「**グリーンインフラの概念について(整理)②**」(P10)
- データの取得方法については、他機関で測定されたデータを自動的に集約できるような仕組みを構築する方がいい。→「**⑤新技術・DXの活用**」(P19)
- 地方創生2.0でデジタル公共財に焦点が当たりつつあり、グリーンインフラでの活用方策を考える必要。
→「**⑤新技術・DXの活用**」(P19)

※赤字は、資料2「グリーンインフラの今後の方向性(中間整理案)」の対応箇所。

《進捗管理について》

- 現状の観測指標は、ほとんどがインプット指標となっている。最終的にWell-beingに繋げるという考え方を整理した方がいい。
- 現在示されている指標は状態目標に近いものとなっており、目標に向けた具体的な行動が示されないため、行動目標のような議論があってもいい。
- 取組のインプット・アウトプットを観測するだけでなく、自然資本とその他資本の関係性を見える化し、施策を進めていくことがあるべき姿。
- 資料に掲載されているもの以外にも、さまざまな指標が考えられるのではないか（流域治水、維持管理、永続性に関する事項など）。

→ 「4 施策の進捗管理について」 (P22)